

# 文理解過程における限定形容詞の処理の検討

— 構造処理が意味処理に与える影響 —

藤木 大介

(広島大学大学院教育学研究科)

Key words: 文理解, 限定形容詞, 構造処理, 意味処理

## 【問題】

本研究では、文理解過程における形容詞(限定形容詞 attributive adjective)を伴う名詞句の意味処理を実験的に観察し、それを通して文の構造処理過程が意味処理過程に影響を与えることを示した。具体的には Table1 にあるような 2 項の名詞句(「形容詞+名詞(noun)+助詞(格標識 case marker)」(以下、名詞句), 「名詞+助詞」(以下、裸名詞句))と動詞(verb)とからなる文の処理過程を観察した。

文の構造処理では「優しい(=形容詞)+警官(=名詞)+が(=助詞)」の様な語の品詞(範疇素性 categorial feature)の解析や、名詞句と動詞との間の項構造(argument structure)の解析が行われる。その一方で、語や文全体に対する意味処理も行われる。

例えば、Table1 に示したような形容関係が「容認可能」な文と「容認不能」な文とは、使用されている語の範疇素性が同じであるから、構造処理は同様に行われると考えられる。しかし、意味処理では「容認不能」文の「厚い警官」という名詞句内に意味的逸脱(選択制限 selectional restriction の違反)があり、意味の形成はうまく進まず、結果、文として容認できないと判断される、と考えられる。

しかし、「容認不能」文と同様に選択制限違反を含む「四角い警官が冗談を言う」といった文でも「四角い警官」を「きまじめな警官」と比喩的に解釈することで「容認可能」となる。これは文中で語が使用されている文脈に即して「四角い」という語の持つ「角張った、堅い」といった論理を「警官」という人の性格の論理に写像し、「四角い警官」という名詞句に「まじめで堅苦しい、きまじめな警官」という「意味づけ(sense making)」(田中 1997)を意味処理において行っている、といえる。容認性の判断、すなわち文が意味をなすか否か、比喩などの可能性を考慮しても無意味なのかといった判断は、文処理過程において程度の違いこそあれ常に行われていると考えられる。そこで、本研究は Table1 の様な呈示文、すなわち容易に意味づけが行われる「容認可能」文と意味づけで手間取り意味処理の負荷が増大する「容認不能」文とを用い、意味処理と構造処理との相互関係に注目し、文理解過程を実験的に観察した。その際、文処理における構造処理の負荷の小さい場合(実験 1)の結果と、負荷の大きい場合(実験 2)の結果とを比較し、考察する。

## 【方法】

「容認可能」文に比して、「容認不能」文は意味処理において比喩の可能性などを考慮しなければならない。このため、意味処理においてより大きな負荷がかかるといえる。そこで、

文理解過程における名詞句や裸名詞句、動詞の各部における処理時間に関して「容認可能」文と「容認不能」文との比較を行い、限定形容詞に対する意味処理の負荷がどの部分で現れるかを検討した。実験 1 では正規語順(-ガ-ヲの順)のみを用いた。これに対し、実験 2 では語順を操作し、非正規語順(-ヲ-ガの順)を呈示文のリストに加えた。これにより、実験 2 では実験 1 に比して、文の語順を認定するために構造処理の負荷が増大する。実験 1, 2 の比較から構造処理の負荷の増大により意味処理過程がどのような影響を受けるかを検討した。**実験計画** 実験 1 は[形容関係](容認可能, 容認不能)×[格](主格, 目的格)の 2 要因計画, 実験 2 は[語順](正規, 非正規)×[格]×[形容関係]の 3 要因計画であった。**材料** 予備調査によって文の容認性を統制された Table1 に示したような呈示文を用いた。**手続き** 移動窓(moving windows)のパラダイムを用いた文容認性判断課題(acceptability judgment task)であった。第 1 項, 第 2 項, 動詞を各窓に呈示し、その呈示時間を処理、及び容認性の判断に要した時間としてミリ秒単位で測定した。**被験者** 実験 1 は大学生・大学院生 18 名, 実験 2 は大学生・大学院生 24 名であった。

## 【結果】

実験 1, 及びこれに対応する実験 2 の正規語順の各窓の呈示時間を Table1 に示す。要因計画に基づく分散分析の結果、実験 1 で形容関係の効果が現れたのは名詞句、及び動詞の部分であった。ここから、呈示文のリスト内で語順操作のない場合は意味処理の負荷が名詞句、及び動詞の部分で増大することが分かった。これに対し、実験 2 で形容関係の効果が現れたのは、動詞の部分のみであった。ここから、語順操作のある場合は意味処理の負荷は動詞の部分のみで増大することが分かった。

## 【考察】

実験 1 と実験 2 の正規語順との課題の差異は 1 つのみであった。すなわち、語順操作の有無である。そして、結果の差異も 1 つのみであった。すなわち、形容関係の効果が現れた部分の差異のみである。つまり、実験 1 において名詞句でも行われていた比喩の可能性などを吟味するための処理が、実験 2 では構造処理の負荷の増大に伴い回避され、動詞でのみ行われたと考えられる。ここから、語順操作の有無による構造処理の負荷の大小の変化が、意味処理に影響を与えることが分かった。

## 【文献】

田中茂範 1997 「意味の使用説」の再考 言語 26, 22-29 (FUJIKI DAISUKE)

Table 1 実験1, 実験2(正規語順)における名詞句, 裸名詞, 及び, 動詞の部分の平均呈示時間(ms).

要因	呈示文	実験1(語順操作なし)			実験2(語順操作あり・正規語順)					
		第1項	第2項	動詞	第1項	第2項	動詞			
容認可能	主格	優しい警官が	冗談を	言う	865	673	1149	894	724	1254
	目的格	女性が	暗い道を	帰る	650	799	1050	664	954	1174
容認不能	主格	厚い警官が	冗談を	言う	1011	731	1636	928	819	1651
	目的格	女性が	強力な道を	帰る	648	918	1756	646	954	1810

1項, 2項は名詞句(下線あり), 裸名詞句(下線なし)の処理に要した時間を表すが, 動詞の部分は動詞の処理に要した時間と容認性判断に要した時間の和を表す。